二次元ドリームノベルズ
プリズンアリーナ
the legend of prison arena
恥辱の闘技場
【小説】ウナル
【挿絵】かにばさみ
試し読み版

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

プリズンアリーナ
the legend of prison arena
恥辱の闘技場
【小説】ウナル
【挿絵】かにばさみ
二次元ドリームノベルズ

プロローグ 006
一章 011
二章 051
三章 086
エピローグ 123

登場人物紹介

Characters

フェネス

女傭兵。“傭兵姫”と呼ばれた凄腕の女戦士。引き締まった肉体を持つ美女だが、男に負けないという意思から言葉遣いは荒々しい。しかしまだ処女であり、周りから女として見られることに慣れていない。

『プロローグ』

ベルブレイズの円形闘技場に入った者は、そのスケールにまず圧倒される。

直径百五十メートル。高さ三十メートル。収容人数は三万人を超える一大建築物。闘技場から観客席までにも五メートル近い高低差があり、分厚い扉は闘技の勝敗が決まるまで開くことはない。そしてそこで行われるのは、何も血なまぐさい殺し合いだけではない。

暴力の側面にはエロスがつきものなのだ。

「こ、こんな格好で……」

恥辱に顔を歪めながらフェネスは通路を抜ける。瞬間、無数の視線が身体に突き刺さり白い肌が粟立った。観客たちの不躾な視線だ。

だが彼らの反応も無理はない。女性としては高い身長に加え、その長身と均整の取れた見事なまでのボディラインを見せられては男の妄想をするなという方が理不尽というものだ。そのうえ、フェネスが着せられているのは痴女丸出しの戦闘衣装だった。やっと乳輪を隠すような極小のトップス、紐も同然のショーツ。そのくせ手甲や肩当てはしっかりと備えつけられているのがかえって劣情を煽っている。

（耐えろフェネス。あと一勝すればいいだけだ。全ては故郷を……セシルを守るため！）

色めき立つ観客たちを睨みながら、フェネスは闘技場中央へと向かった。

◆

春の陽気を残す初夏の季節。大国ベルブレイズはアユリタ王国に侵攻した。アユリタ王国も傭兵をかき集めて兵を揃えたが、ベルブレイズとの国力は圧倒的だ。アユリタは多少の抵抗の後、ベルブレイズによって蹂躙されるだろうと誰もが予期していた。

そんな中、圧倒的戦力を有するはずの帝国軍に悲鳴が上がる。

「傭兵姫だ！　うわあああああっ！」

先兵は一太刀で切り払われた。青草に血が飛び散るより早く金の輝きが手近の五人を切り捨て、さらに陣頭指揮を執っていた兵長の首までも切り飛ばした。

「ふっ。ベルブレイズの兵は揃いも揃って雑兵ばかりか？」

大粒のエメラルドのような緑の瞳。強気に伸びた切れ長の眉。最低限の胸当てや小手のみを装備したその戦装束は、彼女のボディラインをこれでもかと強調している。胸は板金越しにもその溢れんばかりのサイズが見て取れる。あれだけの張り出し方ならとても手の平に収まりきれない爆乳に違いない。腰はきっちりと鍛えられた腹筋に支えられ、流れるようなくびれを描いている。その先に繋がる臀部は戦いの最中でさえ頬ずりしてしまいそ

うなほどの見事な均整だ。
何よりの特徴はその髪だった。純金を溶かしたような見事な輝きはその腰まで届く長さだった。戦場の土煙の中、日差しを照り返した髪はまるで彼女自身が輝いているように見える。その美しさと強さからいつしか彼女はこう呼ばれるようになっていた。
傭兵姫フェネス、と。
蜘蛛の子を散らすように逃げ出したベルブレイズの兵。それを眺めてフェネスは両手剣を鞘に収める。そこにがやがやと十人ばかりの兵たちがやって来た。フェネス同様アユリタに雇われた傭兵たちだ。
「いや～すごいっすね、フェネスさんは。おかげでこっちの兵も押し返せましたよ」
「あの程度の敵を倒せないお前らが弱すぎるんだよ」
「へへっ、そりゃ手厳しい」
汚らしい前歯を見せながらリーダー格の男がフェネスにすり寄ってくる。
「しかしフェネスさんはどうしてアユリタについたんで？」
「どういう意味だ？」
「いや、この戦争どう考えてもベルブレイズの勝ちですぜ。なら勝ち馬に乗って当たり前でしょ。これほどの腕だ。ベルブレイズも大金で雇ったでしょうに」
「ふん。金払いは関係ないな。私は私のためにしか戦わない」

そう言い放ち、フェネスは遥か遠くに霞む山を眺めた。最後に帰ったのはもう一年近く前だろうか。あの時も故郷の村は相も変わらず平和な時間が流れていた。

『無理はしないで。姉さんが危険なことする必要なんてないんだよ』

村に戻るたびセシルは上目遣いでそう言ってくれる。両親を早くに亡くしたフェネスにとっては唯一の肉親であり自慢の妹だ。戦場で荒んだ心もセシルの変わらない笑顔を見るたびに温かく癒される。

ただ彼女の青髪はずいぶん伸びた。これは故郷に伝わる願掛けのためだ。決めた願いが叶うまで髪を切ることをやめる。そうすれば願いが叶うのだとか。

（こうして生きていられるのもセシルのおかげかもな）

妹が自分の無事を願っていることをフェネスは知っている。そしてフェネスもセシルの無事を願って髪を切ることをやめていた。おかげで戦場では悪目立ちして傭兵姫なんてあだ名をつけられるはめになってしまったが。

（そうだ。セシルのためならなんでもできる。ベルブレイズの豚どもを通しは――）

ガンッ！

衝撃がフェネスの後頭部を襲った。

「なっ、き、貴様ら……！」

「傭兵姫も気を抜いたらただの女ってね。悪く思うなよ。俺たちはこんな国と心中なんて

まっぴらなんだ。へへっ、ベルブレイズにいい土産ができたぜ！」

（ちくしょう……こんな奴らに……っ！）

傭兵たちの降伏交渉の声を聞く。敵兵の驚きそして嘲笑の声に晒されながらフェネスは意識を失った。

『第一章　傭兵姫、散華』

目を覚ましたフェネスは寒々（さむざむ）とした牢屋の中に居た。座っているだけで体力を奪う冷たい石壁と床。採光窓すらない薄暗さによどんだ空気。どこか遠くでは獣の唸り声が聞こえてくる。

「お目覚めかな。フェネス殿」

姿を見せたのは乱杭歯（らんぐいば）がはみ出た大柄の男だった。ぎょろりとした目に浅緑色（あさみどりいろ）の肌からしてモンスターの血が混じっているのだろう。それでいて貴族が着るような気立てのよい服を纏っているというのだから異様もいいところだった。

「誰だお前は？　ここはどこだ？」

「申し遅れました。私はガルガ。この闘技場の仕切り役です」

「闘技場だと？」

血気盛んなベルブレイズには奴隷やモンスターを戦わせる闘技場がある。そんな話をフェネスも聞いていたが、まさか自分がそこに運び込まれるとは思いもしなかった。

「フェネス殿にはここの闘技者となっていただきます」

「はっ！　笑わせるな！　帝国の豚どもの見世物になるなんて死んでも断る！」

「さすが音に聞こえた傭兵、素晴らしい胆力だ。しかしフェネス殿、順序は守った方がいい。もしここから抜け出せたとしてもあなたは追われる身だ。そうなっては故郷の村を救うのに間に合わなくなるのでは？」
「な――」
「色々調べさせてもらいました。あなたがアユリタ王国の寒村の出身であることや、傭兵稼業で稼いだ金をそこに送金していたことなどをね。いやはや泣かせますね。貧しい故郷のために身を危険に晒して金を稼ぐ麗人の傭兵。素晴らしいストーリーです」
「き、貴様！」
「ベルブレイズ軍は順調に侵攻中です。ここを脱走しても逃げ回りながら故郷まで辿り着けますかな。それよりもここから合法的に出た方が合理的でしょう。それとも、まさか闘技者に勝つ自信がないのですか？」
　その一言にカッとフェネスの頭に血が上る。剣一本でどんな戦場でも生き抜いてきたフェネスだ。その腕を疑われることは顔に糞を投げつけられたも同じである。
「舐めるな！　誰が相手だろうと私は負けない！」
「ならば問題ないでしょう。十勝、わずか十勝すればあなたは自由だ。それに私は軍にも顔が利きましてね。もし十勝できたなら将軍に働きかけてあなたの故郷を侵攻ルートから外すよう進言しますよ」

「……ずいぶん気前がいいじゃないか」
「それだけあなたを闘技者にできるのは魅力的だということです。傭兵姫の名はこの国にも響いていますからね。もしあなたが試合に出るとなれば大幅な集客が望めます」
「約束を違えたらただじゃおかないぞ」
「もちろんです」
舌打ちしてフェネスは息を吐く。他に選択肢はないようだ。

◆

そしてフェネスは、勝ちに勝った。
「もうおしまいか。えーと。バンジョだったか？」
目の前に立つ男に言い放つ。身長はフェネスより頭一つ分は大きく、その筋肉量はフェネスの倍はありそうだ。そんな男も幾多の戦場を渡り歩いたフェネスからしてみればありふれた敵兵の一人にすぎない。
「ぐっ！　バンジャだ！」
打ち込まれた斬撃を切り払う。地面に突き刺さる片手剣。決着のラッパが鳴らされ、目玉のような魔道具が勝者の姿を闘技場の上空に映し出す。

（闘技場の花形と聞いたが拍子抜けだな）
頭上に浮かび上がる自分の映像を見ながらフェネスは嘆息する。やはり見世物にされるのは性に合わない。特に周囲を飛び回る目玉オバケには辟易する。ベルブレイズが開発した魔道具らしいが、まるで全身を舐められているような不快感だ。
（だけどこれで間に合う。軍もまだ村まで侵攻していないはずだ）
バンジャとの戦いも含めてこれで九連勝。人間の闘技者はもちろんオーガやミノタウロスといったモンスターですらフェネスの敵ではなかった。闘技場脱出にリーチがかかり、がらにもなく胸を撫で下ろす。そんな自分の姿を観客たちが舐めるような目つきで見つめていることには最後まで気づかなかった。
「さすがですよフェネス殿。まさか前代未聞の九連勝を達成するとは」
卑屈な笑みを浮かべるガルガを一瞥し、フェネスはスープをすすりパンを口に押し込む。
「あと一勝だ。すぐにでも試合を組め。約束は忘れていないだろうな？」
「もちろんです。このガルガ、商売上の契約は破ったことがないのが自慢でして。それでフェネス殿。次の試合なのですが、少々趣向を変えさせていただきたいのですが」
「なんでも来い。ドラゴンか？　デーモンか？　何が来ようと私は負けない！」
「それは頼もしい。記念すべき十戦目をぜひ華々しく飾ってください」
「言われるまでも……っ……」

強烈な眠気がフェネスを襲う。食事に薬を仕込まれたと気づいた時には身動き一つ取れなくなっていた。
「ガ、ガルガ……お前っ！」
「ここからが本番ですよ。ベルブレイズ闘技場の本当の姿、愉しみにしてください」
下卑た笑いを浮かべてこちらを見下ろすガルガ。その顔に自分を裏切った傭兵たちの姿が重なった。

「うくっ……ここは？」
鎖の音にフェネスは目を覚ます。はっと手足を動かすも硬い感触に身体の自由が利かない。見れば天井から伸びた鎖が腕を釣り上げており、足も床に固定されていた。
「なん、なんだこれは⁉」
自身が着せられている服にフェネスは声を上げた。それはビキニアーマーとでも形容すべき恥知らずな鎧だった。胸先にちょこんと乗った布地はフェネスの巨大な膨らみを隠すにはあまりにも頼りない。ショーツも前張りのようなサイズしかなく動けば恥ずかしい穴が見えてしまいそうだ。そのくせ籠手や肩当て、ブーツといった装備はしっかりと残っており、それが各所の肌色をより際立たせている。
痴女。そんな単語がフェネスの中に反響した。

「特製の衣装は気に入っていただけましたかな？」
「ガルガ！　これはどういうことだ！　こ、こんな服、頼んだ覚えはないぞ！」
取り巻きを伴い悠々と部屋に入って来たガルガ。暴れるフェネスにも余裕の態度を崩さず、息も吹きかかる距離まで近づいて来た。むっと香る男の臭気が鼻につく。
「言ったでしょう。趣向を変えるのですよ。今やフェネス殿は人気闘技者ですからね。記念すべき十戦目、戦う姿にも華が欲しいので」
つつっ、と太い指先がヘソを撫でた。そのまま胸をつんと弾き、フェネスの首を這い上がる。右手は顎を掴み、左手が金の髪をすく。
「思った通りよくお似合いだ。これなら客も喜びます。ああそうそう、対戦相手も決まりましたよ。バンジャです」
「バンジャ？　あの男か？」
九戦目の戦いを思い出し、フェネスに多少の余裕が戻る。確かに鍛えた肉体を持っていたようだが、本気になったフェネスに挑むには明らかに力不足な男だ。
「衣装が変わっては戦えないということはないでしょう？」
「冗談。あんな奴、片手でも倒してみせる」
「結構。では、試合前にいつもの身体検査をさせてもらいますよ」
「なっ！」

むにゅっ。

ガルガは無造作にアーマーから手を滑り込ませ胸を鷲掴みにした。汗で滑った男の手の感触にフェネスは身をこわばらせる。身体検査。それ自体は毎試合ごとにされていたことだ。だがこれほどまでにあけすけに身体を触れられたことは今までなかった。

「おお、素晴らしい弾力だ。筋肉に裏打ちされた体幹に加えて、このパン生地のような柔らかさ。まさに人体の神秘ですな。それにこの大きさ。私の手ですら掴みきれないとは」

大柄のガルガですら掴みきれない巨乳。強く握れば指間からむにゅっと乳肉がはみ出て温かな体温が指を包んでくる。そのままガルガは強めの力でおっぱいを揉み始める。太い指先が動くたび双丘が自在に形を変える。

「や、やめろガルガ！　こんなこと必要ないだろう！」

「そんなことはありませんよ。ほら、ここに硬い物がありますよ？　これはなんですかな？」

こりっ、くりっ。

乳房の中心にある突起を爪先が摘み上げる。痛みとも痒みともとれない感触にフェネスの背が反らされ、やがて乳首は小生意気にそそり立ってしまう。

「もしかして隠し武器では？　そんな物を持ちこまれてはこちらの信用問題になってしまいますので」

「ち、違う！　それは私のち、ちく……っ！」
かぁ、と首から顔に血が集まる。普段意識しない女の部分。それを指摘されてフェネスの身体はじんわりと熱を帯びた。目の前に立つガルガの視線を意識しまいとすればするほど胸先の敏感勃起は硬度を増し、完熟の木苺のように張り詰めてしまう。
「こちらはどうですかな？　女には穴が二つもありますからね。しっかり調べないと」
「な、な！　やめ！」
慌てて股を閉じようとしたフェネスだが、頑丈な鎖がそれを阻む。
「その鎖は特注の物です。いかにフェネス殿でもちぎれる代物ではありませんよ」
ガルガの言う通り、手足の鎖は力を込めてもビクともしなかった。無駄な抵抗を続けるフェネスを余所に、ガルガはゆっくりと腰を落として極小のショーツへと顔を寄せる。
「さあ、ご開帳です」
ショーツがずらされ、恥部がガルガの前に晒される。薄く茂った金の陰毛、肉ヒダの中に隠れたピンクの真珠、そして子宮へと続く肉の穴。それら全てを見られてしまう。
「ほう、綺麗ですな。まるで生娘のようだ。入り口はぴっちりと閉じ、唇も広がっていない。遊んでいるかと思いきやフェネス殿はなかなかに敬虔なようだ」
「……もういいだろう。早く手を離せ」
「何をおっしゃる。ここからが本番ですよフェネス殿」

くちゅっ。くにっ。

防壁の除かれた恥部に野太い指先が攻め入ってくる。少し湿った恥部は柔らかく、ガルガの指を優しく受け止めてしまう。一方のガルガの指遣いも非常に熟練しており、あっさりとフェネスの穴を見つけ出すとそれを両手の指で開いてみせた。

「素晴らしい柔らかさですね。まるで最高級のサーロインのようだ。どうやらフェネス殿はこちらの肉も極上のご様子。では失礼して中も調べさせていただきますよ」

「そ、そんなところに……ああっ！」

ぬぷっ。ぬぐぐっ。

「おお、なんと素晴らしい締めつけだ。これは注意しなければ指が食いちぎられてしまいそうですな」

左手で恥肉を広げつつ、右手の中指がフェネスの膣口へと入り込む。検査という名目を守るためか、ガルガは奥までは指を入れなかった。だがそれは愛撫される方からしてみれば焦らされているのも同じだ。にちにちと粘膜を開かれ、隅々を指先で撫でられる。指先がわずかに動くたび、フェネスはピクピクと腰を震わせてしまった。

「さて、こちらも調べますか」

「そっちは……つぅ！」

にゅるるっ。ぐぷうっ。

秘所を広げていた左手が臀部へと回され、その菊門へと中指を押し込む。本来排泄にしか使用されない穴への侵入に総毛立つ。
「んっ！　くぅぅっ！」
ぬちゅっ、ぬちっ、ちゅくっ。
両の指を押し合うように動かされ、フェネスの腰もそれに合わせて前後に振れる。まるでガルガに操られるマリオネットのようだ。
「ふむ。確かに何も隠していないようですね」
いけしゃあしゃあとガルガが言い放ち、フェネスの中から指を抜く。粘液が付着した指をハンカチで拭われる間、フェネスはガルガを殺さんばかりの視線で睨みつけていた。
「……ガルガ、お前は必ず殺してやる」
大仰な仕草で手を広げながらガルガは背後の取り巻きに目配せをする。取り巻きは一抱えもある瓶をガルガへと差し出した。その中にはわずかに緑に色づいた液体がある。
「な、なんだそれは。何をする気だ」
「なに、ちょっとしたおまじないですよ。フェネス殿の勝利を願って、ね」
べちゃっ！
「ふぐっ！」
肩口に押しつけられた生暖かさに顔をしかめる。気持ち悪い。まるで泥と煮凝(にこご)りを混ぜ

合わせたような感触だ。ガルガはそれを丹念に広げていった。いや、わざと時間をかけてフェネスの身体を触り続けているのだ。粘液が絡みついた肌はぬらぬらと淫猥な光沢を放ち、フェネスの形体をさらに浮き彫りにさせた。

「予想以上に扇情的な姿ですな。これならお客様も大喜びだ。では行ってもらいましょう。最高の舞台があなたを待っていますよ」

手足の鎖が外され、愛用の剣が差し出された。それを奪うように握り、ガルガの横を通り過ぎる。

（すぐに終わらせてやる。そうすればこんな茶番もおしまいだ！）

ふつふつと沸く怒りを胸にフェネスは闘技場へと続く道を歩み出した。

◆

日差しの中に足を踏み入れた瞬間、数万の歓声がフェネスの顔を叩いた。

（な、なんだこいつらは！　なんでこんなに！）

今までは半数埋まれば良い方という状態だった観客席に、隙間もなく人々が並んでいた。来賓席には豪華な服を着た貴族たちが並び、うちわ片手にこちらを見ている。その全員が異常な熱を帯びた視線でフェネスを見ていた。

フェネスの呼吸に合わせて蕩けマンコはゆっくりと動いていた。トロトロの内部には糸の架け橋ができており、それが垂れ落ちバンジャの指を濡らしていく。そのままバンジャは指での愛撫へと移行した。先ほど胸にしたように優しい手つきで秘所をなぞる。それに加えて左手では胸を揉みしだき、舌での耳愛撫も忘れない。

「ふっ、くっ……くぅ！」

「気持ちいいんならイっていいんだぜ？　傭兵姫の喘ぎ声を聞かせてくれよ」

優しく囁く声に唇を噛んだ。実際、今まで自分を慰めてきた時より遥かに気持ちがいい。バンジャの手つきはただ指を動かすという自分の自慰行為とは一線を画すものだ。快感から逃れようとする動きを鋭く感知して指を這わせ、さらなる快感に変えていく。秘部の快感が鈍ったと気づけば胸と耳への責めを強くする。全身の官能を剥き出しにする熟練の手業だった。

（か、感じてなどいない！　感じて……など！　ああぅ！）

ぐりっ、とした刺激に思わず声が漏れる。それが陰核に指が触れただけだと気づくのに相当な時間がかかってしまった。

「豆が好みか？　皮被りの童貞クリトリスとはエロイねえ。くく、このままお前の性感帯を丸裸にしてやるよ」

クリトリスへの刺激。その言葉にフェネスはぶるっと身体を震わせてしまう。

えっちな試し読み スタート

（ダ、ダメだそこは！）

陰核は女体の中でも特別感じやすい部分だ。そしてフェネスのそれは他人よりもさらに大きく感じやすい。クリトリスオナニーをした時には危うく失神してしまうところまで達してしまいそれ以来封印していた。そこを容赦なく責められたら――。

「まずは皮を剥いてオトナにしてやらねえとな」

「ま、待っ……くひっ！」

既に半分顔を出していた豆の皮をバンジャの指が剥いてしまう。空気に晒される、それだけでフェネスの口からは抑制しきれない甘い声が零れ出た。バンジャは陰唇からクリトリスまでを指先でなぞる。ぞくぞくとした刺激が下腹部全体に広がり、先ほど以上の声を上げてしまった。

（ち、乳首にも指が！　そ、そんな同時に⁉　だ、ダメだ！　ダメダメダメぇ！）

バンジャは右手で陰唇を責めながら左手で乳首を握ってきた。乳首と陰核の同時責め。敏感な部位ツートップをいっぺんに攻撃され、フェネスは慌てて口を手で塞ぐ。そうでもしなければ無様な喘ぎ声を漏らしてしまう。しかし邪魔のなくなったバンジャの手はここぞとばかりに責めを強くした。ぐりぐりと陰核を指先でこねまわり、乳首を強く握りながら引っ張る。

（な、何か来る⁉　来るぅ！　身体の奥から何かがぁ！）

下半身の奥から津波のような衝動が迫ってくる。それを出してしまえば自分が変わってしまう。理屈ではなく直感としてフェネスはそれを理解した。

（耐えないと……耐え……たえええええええっ！）

歯を食いしばり、赤子のように手足を縮めてフェネスは身体中の快感を抑え込む。だがそんな抵抗など、媚薬と熟練竿師の前では吹けば飛ぶような防壁だ。足をさらに広げさせられ快感の逃げ道を塞がれる。そしてフェネスの眉が八の字に寄ったことを確認し、バンジャの手が一層激しさを増す。

「思いっきり……絶頂け！」

乳首とクリを同時につね上げられた。敏感部分に与えられる痛みと快感に、身体の奥から熱いものが一気にほとばしった。

（んんんくうあああうううううううううううっ！）

ぶしゅっ！　びしゃっ！　ぷしゃあああああああっ！

透明な汁が闘技場に吹き上がる。鍛えられた身体は潮吹きの勢いも強いのか、まるで噴水のような勢いに会場から口笛が響く。

「あ、ああこれはなんだぁ。わ、私の中からいっぱい……はふうっ！」

自身の身体から吹き出る未知の液体に、フェネスは顔を歪める。こんな現象も感覚も今までの人生にはなかった。戸惑いと不安に必死にお腹に力を入れるが、そうすればするほ

ど勢いよく汁が飛び出てさらなる快感になってしまう。
ようやくその潮吹きが終わった頃には、フェネスはぐったりと脱力してバンジャの胸板に身体を預けてしまっていた。
「ちっ、声は上げなかったか。だが初アクメで潮まで吹くとはな。天にも昇る気持ちよさだったろう？　もうこの快感からは逃げられねえぜ。さてトドメを刺してやるか」
「あ、熱……ひっ！」
股間に感じる硬く熱い感触に目を向ければ、赤黒の肉が天に向かってそそり立っていた。
「さすがにチンポくらいは見たことあるだろ？　どうだい俺の自慢のイチモツは」
「う、嘘だ……だ、だってこんな大きさなんて……」
フェネスとて戦場を生きてきた女だ。男の裸くらいなら見たこともある。だがこれはフェネスの知識にある男性器とはまるで違っていた。
肉の棍棒。
そうとしか表現できない肉塊がそこにあった。子供の腕ほどもあるだろうサイズに槍のような形状。フェネスの体重を支えるほどの強度と力強さ。浮き出た血管がグロテスクさに拍車をかけており、これが人間の一部とはとても思えない。新種のモンスターと言われた方がまだ信じられる。
それがぬちぬちと股間に擦りつけられている。

「や、やめ！　そんなの入るわけ！」
「入る入らないじゃねえ、入れるんだよ」
バンジャはフェネスの太ももに手を回して抱え上げた。幼児がおしっこをする時のポーズだ。なんとか抵抗しようにも一度オーガズムを味わった身体には力が入らない。ぐっと両足を持ち上げられ股間に肉棒が添えられた。
背面座位。女が屈服する様を見せつける恥辱の体位である。力強い肉体はフェネスを容易く持ち上げる。これでは隠すことすらできない。せめて膣で拒絶しようと思うのに、ヒクつく膣口はその先端を求めるように吸いついてしまう。
「傭兵姫様の処女喪失だ。しっかり撮れよ」
撮影機の数はいつの間にかさらに増え、密着せんばかりの距離でフェネスの処女喪失を今か今かと待っている。
「い、い、いふううううううっ！」
ずぶっ！
ズラされたショーツと恥肉を押し広げながら巨大な質量が身体の中に入ってくる。祝砲のようにぶしゅっとラブジュースが溢れ、たっぷたぷの睾丸に降り注いだ。
「マンコへの一番槍いただきだな。くぅ、すげえキツキツだ。まだ先っぽだけだってのにがっちり締めつけてきやがる。そのくせ肉は霜降り肉みたく柔らけえとはとんでもねえ名

器だ。こいつは気合い入れねえとすぐ搾り取られちまうぜ！」
　おマンコ実況をしながらバンジャはさらに腰を落とす。ギチギチと音を立てながら肉の槍が膣肉を開拓し、やがて強い抵抗に突き当たる。
「これがお前の処女膜か。本人と同じでお堅いな。どうした？　抵抗しなくていいのか？」
　バンジャに言われてはっと気づく。それは結婚するまで大事に取っておかなければならないヴァージンの印だ。自由の利かない身体ながら、フェネスはバンジャの背中に手を回し、その皮膚を引っかいた。それが今できる精一杯の抵抗だった。
「だ、だめだ……それは大事な……結婚するまで絶対になくしたらいけない大切な……」
「そうだよな。愛する人との夜のために大事に取っておいたんだもんなあ」
　バンジャの優しい声にこくこくとフェネスは頷く。もはやこの状況で縋れるものはバンジャの心変わりの他にない。それが糸のように細い可能性だとしてもそれに手を伸ばさずにはいられなかった。
「可哀そうにな。そんな大切な処女を……愛してもいない男に奪われるんだからなあ！」
　ぶっちぃぃぃっ！
「ひ、ひあああああああああああっ！」
　生々しい音が耳に響き、ナイフで斬られたような鋭い痛みがあった。じくじくと痛む下腹部に、フェネスの眼にうっすらと涙が浮かぶ。

「くくっ、残念だったな。お前の処女はこの俺が美味しくいただいたぜ！　みんな見ろ！傭兵姫の処女を奪ったのはこのバンジャだ！」
ヴァギナからつーと垂れた赤に大歓声が上がる。観衆たちの興奮の声とバンジャの勝ち誇った笑みに囲まれてフェネスは処女を失った。
（こ、こいつらには……女性の純潔すら玩具でしかないのか！）
破瓜の痛みはすぐに引いてしまった。代わりにやってくるのは猛烈な快感だ。そのことが何よりフェネスは許せない。
「あ、あああ！　殺す殺してやるうう！」
「チンポ入れられながら凄んでも怖くもねえよ。おら、殺せるもんなら殺してみろ。その淫乱マンコで俺のチンポを倒してからな！」
「ひっ！　くっ！　こ、殺……んくあああああっ！」
ずぶっ！　じゅぶっ！　ごじゅっ！
クワでも振るうようにバンジャの腕が身体を上下させる。ごつごつと亀頭が子宮の入り口をノックし、カリ張った傘が膣壁を擦り上げる。そのたびにぷるぷるっと巨大な胸が揺れて汗をまき散らす。
「処女膜を貫かれて口の方も緩くなったか？　いい声だぜフェネス」
「き、気安く呼ぶな！　呼ぶ……お、おっくううううっ！」

「さ～て。それじゃあいただくかあ！」

フェネスの腹を跨いだオークはそのまま腰布を投げ捨てた。姿を現した肉棒にフェネスは「ひっ」と声を上げてしまう。

（な、なんだこの形！　バ、バンジャのと全然違うじゃないか！）

渦をまくようにねじれた陰茎。先端部は皮が被り、紫色に充血した亀頭がわずかに見えている。太さこそバンジャのペニスには敵わないが長さはかなりのものだ。そのうえ、棒の下には握り拳のような袋が二つもぶら下がっている。

「ぶふふっ！　それじゃあその乳で楽しませてもらうぞ！」

「あぐっ！」

腹上にどすんと腰を落とされてフェネスは思わず悲鳴を上げてしまった。股間から潮の残り汁が吹き出し軽く絶頂を覚えてしまう。当のオークはそんなことお構いなしに腰を乳房に擦りつけると、胸アーマーを下部にずらして乳房の間に肉棒を滑り込ませた。人並以上に巨大なイチモツはフェネスの巨乳に挟まれてなお先端を谷間から露出させている。

「ひっ⁉　な、何を！」

「ぶへへへっ！　パイズリだよパイズリ！　知らねえのか？　おっぱいでチンポを挟むでしごくんだよ！」

「そ、そんな……胸で挟むなんて……」

えっちシーン試し読みコミックス！

自身の胸を押し開きながら飛び出してきた肉の槍。目の前に迫るその先っぽは既に先走りの汁でぬるぬるとなっている。見慣れた胸の谷間からグロテスクな生殖器が顔を出している様は、悪夢でも見せられているかのような非現実感であった。

（く、臭い！　な、なんだこの臭いは！　まるで下水だ！）

鼻先にぶつけるような異臭の元は間違いなく目の前の肉棒だろう。見れば皮に隠れた先端には白いカスのような物が浮いており、それが強烈な臭気を放っているらしい。

「や、やめろぉ！　こんな汚い物、近づけるなぁ！」

「おお、さっきまで俺の足で潮吹いていたくせに元気だな。ぶひっ！　活きのいい雌を犯すのは本当に楽しいぶひ！」

「人の話を聞けぇ！　早くこのゴミを……んひぃっ⁉」

鋭い爪が乳首に食い込みフェネスはカッと目を見開いた。オークが爪を立てて勃起した乳首を力のままにねじっているのだ。

「うるさいんだよ！　いうこと聞かないとこの乳首をちぎるぞ！」

「や、やめ！　痛っ！　本当にちぎれるぅ！」

勃起した乳首に血が滲（にじ）む。オークは本気だ。バンジャがしたような愛撫の緩急ではなく、本気でちぎるつもりで力を込めている。媚薬によって敏感にされた乳首はその痛みを通常の何十倍にも増幅させている。さらに乳首をねじり上げられ、「みりっ」という嫌な音が

聞こえた時点でフェネスは白旗を上げた。
「わ、わかった！　わかったから乳首やめろぉっ！」
「やめろ？　それがお願いの仕方か！」
「ひいいいっ！　や、やめてください！　お、お願いします！」
下等なモンスターへ懇願するしかない自分にフェネスは痛いほど目を閉じる。
「ぶひひっ！　思い知ったか！　これに懲りたらもう俺様に逆らうんじゃないぞ！」
「わ、わかった……んあぁ！　わ、わかりました！」
トドメとばかりに乳首をつねられ、フェネスは上擦り声で返事をする。その様に満足したのかようやくオークは充血した先端から指を離した。安堵のあまり息を吐いてしまう。上空に映し出された映像にはフェネスの目尻に浮かぶ雫が、はっきりと撮影されてしまっていた。
「ははははっ！　オークに胸を掴まれて涙目になってるぜ！」
「傭兵姫なんて呼ばれているくせにオークに逆らえないなんてなあ！」
「オークの家畜にでもなっちまったらどうだ？　一生可愛がってもらえるぞ！」
ここぞとばかりに飛ぶ観客の声にフェネスは唇を噛む。しかし激痛だったはずの痛みは次第にジンジンとした快感へと変わっていた。媚薬に侵された身体はこんな苦痛すら快感に変えてしまう。どんな傷を負っても怯むことのなかった強靭な肉体は、もうどこにもな

かった。
「おら、ボケっとしてないで胸を動かすんだ！」
「う、動かす？」
「本当にバカだなお前は！」
「んぎゅっ⁉　や、やめてぇ！」
容赦なく乳首を摘まれ、たまらず悲鳴を上げてしまうフェネス。そんな声を無視してオークは乳首を摘んだまま前後に動かした。
「こうやって乳を動かして俺様のチンポにご奉仕するんだよ！　気持ちよくならなかったら乳首ねじりの刑だぞ！」
「ひぎぃっ！　や、やめてええっ！　動かす！　動かすから！」
やっと乳首を解放され、フェネスは荒い呼吸を整える。急かすように腰を振るオークにフェネスは震える手で乳房を持ち上げた。
「うっく……こ、これでいいのか？」
にゅるっ。くちゅっ。ぷるっ。ぷるる。
かつてバンジャにされた動きを思い出し、胸を寄せては円を描くようにチンポを擦る。
「ぶひひっ、デカおっぱいのパイズリだぁ～。暖かくて柔らかくて最高～っ！」
胸を動かし始めたフェネスにオークはご機嫌に豚鼻を鳴らす。その口からは黄ばんだよ

だれが垂れ、焦点の定まらない瞳でどこかを見ている。一方のフェネスは気が気ではなかった。硬く勃起した男性器は散々に犯されたフェネスにとって凶器以外の何物でもない。そのうえ、もしオークの機嫌を損ねようものなら、また乳首への激痛が待っているのだ。乱れがちな呼吸を意識して整えながらフェネスは慎重に胸を動かす。

（くっ、こんなもの切り落としてしまいたい……しかしこんなに硬くなるものなのか。それにヤケドしそうなくらいに熱くてドクドク脈打っている……ああ、汁が垂れてきた）

自身の胸間から顔を出すたび、にちゃにちゃと音を立てる豚ペニス。その先端からの溢れ汁は量を増し、胸全体に悪臭が刷り込まれていく。

「デカ乳にマーキングだぁ！　ぶひっ！　これでお前の胸は俺様のものだな！　よーし！　そのままフェラしろ！」

「フェ、フェラ？」

「俺様のペニスをペロペロしゃぶるんだよ。風呂にも入ってないからチンカスだらけだけどな！　ぶひぶひっ！」

「――な」

正気とは思えない言葉にフェネスはめまいすら覚える。この闘技場に来て以来、今までの常識を曲げるほどの異常事態に襲われ続けたがこれは極めつけだった。

（じょ、冗談だろう？　こ、こんなもの舐めろというのか！）

一体どれだけ放置していたのか、包皮の中には黄ばんだ恥垢が見え隠れしている。まだ直接触れてもいないのに鼻奥にはツーンとしたイカ臭さが届き、股間の縮れ毛も生え放題だ。不潔さを凝縮したような肉棒を前にフェネスは顔が引きつるのを止められない。

「おら、早くしろ！」

呼吸を止めたフェネスの髪を乱雑に掴み、オークはその顔を肉棒へと擦りつける。

「や、やめ！　髪はやめてくれ！」

セシルへの思いを込めた長髪を握られ、フェネスは慌てて白旗を上げた。今まで大事に守ってきた金髪を傷つけられるのは愛しい妹を傷つけられているような危機感を覚えてしまうのだ。

「だったら早くしろ！　愛情を込めてしっかり舐めるんだよ！」

「〜〜〜〜〜っ！」

鼻穴に鈴口が押しつけられ、フェネスは声にならない悲鳴を上げる。一瞬だが意識が飛んだ。それほど強烈な臭気であった。

「は、は、う、くぅ……れ、れろっ……」

舌先が肉棒に触れた。瞬間、殴られたような衝撃が脳裏を叩く。

（に、苦い！　臭いぃ！　こ、こんなのを舐め続けろと言うのか！　だ、だめだ！）

予想の百倍はえぐい味わいに、フェネスは思わずチンポを吐き出し唾を吐き捨てた。

「げほっ！　おげっ！　こ、こんなもの舐められない……はぐうううっ！」
乳首に激痛が走り、股間のバイブたちが一斉に震えた。
「言い訳するな！　舐めるんだよ！　じゃないとこんなもの！」
「いぎいいいいいいいっ！」
痛みに背筋が反り返り口端から泡が漏れ出る。一方で膣内の張り形が容赦なく快感を与えてくる。痛みと快感。相反する二つの強烈なシグナルに頭が割れそうだ。ただそれから逃れるためだけにフェネスは口を開いて豚マラにかぶりつく。
「んっ！　じゅぷっ！　じゅるるるっ！」
「ぶふふっ。初めからそうしてればいいんだ！」
ペニスに口を這わせ始めたフェネスに豚鼻から臭い息が吹きつけられる。
（どうしてこんな……くぅっ、ざらざらした感触が……）
味蕾にチンカスの感触が触れ、ぞくぞくとした悪寒が背筋を震わせる。仰向けにされていなければ嘔吐していたかもしれない。
「そのまま皮の中に舌を入れるんだ。美人傭兵の皮剥きだ！」
「げほっ！　な、中まで？　うぅ……ぺちゅっ、ちゅっ」
「こら！　胸が止まってるぞ！」
「ふぶうううううっ！」

命じられるままに胸を寄せて陰茎を扱き上げ、包皮の中に舌先を滑り込ませる。皮の中はまるで腐った卵白のような有様だった。どれだけため込んでいたのかどろりとした完熟恥垢が舐めても舐めても奥から出てくる。胸に挟まる陰茎も血管を浮き立たせ、さらに質量を増している。

「お、おほぉっ、剥けてきたぞお！　傭兵姫様は皮剥きも上手だな！」

「ぐ、うちゅっ、じゅるるっ！　う、はあああ……っ」

ずるりと皮がめくり上がり、オークチンポの全容が露わになる。それはまさにケダモノの生殖器だった。皮がめくれてなお健在なねじれた形状。臭気はますます強くなり、皮はこのチンポの覆いでしかなかったと思い知らされる。

「上手に剥けたなあ。それじゃあ、ご褒美だ。そのまま先っぽを吸い上げるんだ。俺様のチンポをしゃぶれるなんて最高のご褒美だろう！　もちろんおっぱいも忘れるなよ！」

「す、吸い上げ……っ！」

どこまでもエスカレートしていく要求に涙が滲む。息を整えようと深く吸えば吸うほど雄の臭いもともに身体に入り込んでくる。

「う、ぐ、ちゅ、じゅるるるるるっ！」

「おっほおおおおおっ！　吸い込まれるぅ～っ！」

先端を咥え込み、全力で吸い上げた。唾液とカウパーとチンカスの混ざったものが口内

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/